

校歌の話 (改訂版・平成二五年一月二七日)

渡辺誠治(昭二七年三月卒)

わたくしたちの期は終戦翌年の昭和二一年四月に旧制千葉中学に入学したが、その後の学制改革で新制千葉高等学校となり、翌二二年からは旧制中学の生徒募集が停止となったため、新制高校一年生までの四年間、最下級生を務め、都合六年間葛城台上で過ごしたという、まことに特異な学年であった。

そのようなわけで、母校に対する思いも格別なものがある。偶々わたしは御縁があって母校の国語科教員となつて、定時制四年、全日制九年を勤めた。職業柄か、いささか本校のみならず他校も含めて、校歌なるものに関心を持って来た。

以下の文は、そのことについて本校校歌の分をまとめてみたものである。これを読む人、心あらば、拙文の叙述不足の補い、また誤記の訂正を願って止まない。

一、千葉中学校校歌 大正四年制定

作詞 千葉中学校

作曲 東京音楽学校 教授 楠美恩三郎

思えば明治一一年(一八七八)八月六日に本校が創立されてから三十余年間も校歌がなかったことになり、今日の我々の感覚からみると、何とも不思議なことである。しかし一方では本校の場合、旧制高等学校あたりの影響からか、「寮歌」「応援歌」などの歌は作られ、それぞれの所で盛んに唄われていた。たとえば明治四三年頃、

端艇部の活動がもっとも盛んな時代で、学年対抗や千葉医専との対抗戦が行われ、学年対抗では各学年が応援歌を作った。大雑把に言えば、これは当時の千葉町の楽しい年中行事の一つでもあった。①

もっとも校歌がないという現象は、それなりの時代の風潮というものがあつたようである。別に本校だけの現象でもなかつた。大雑把に言えば全国的に明治三十年頃から小学校を中心に校歌制定の動きがさかんになり、大正期から昭和初期にかけて中学校などでも校歌制定の動きが広がってきたようである。②

作詞は千葉中学校とあり個人名ではない。一体これはどうしたことか。③ 今となってはわたしには調べようがない。思うにこうした団体歌の作詞者を記す場合、次の三通りがある。一つは個人名をはっきり記す場合。二つは個人名を記さずに団体名を書く場合。三つは自然発生的に出来てきて結果的に作者不詳として出す場合である。二つ目の例は、ご存知昔の文部省唱歌集を思い出してもらいたい。それぞれの詞は本当に素晴らしい。これだけの作品でありながら、個人名は明記されていない。ただし陰ながら伝わっている。こうした例は枚挙に暇がない。だから本校の場合なども、当時校歌を作ろうではないか、ということになり、多分国語科の教員の誰かが中心作者となり、それを基にしてあれやこれや提言があつて、結局「作詞・千葉中学校」となつたのであろう。同様なことは作曲者の場合でも見られる。

作曲者楠美恩三郎について。慶応四年三月青森県弘前市の出身。

「尋常小学読本唱歌」の編纂に携わり、童謡、唱歌を作曲したほか、旧制第二、第八高等学校など多くの学校の校歌を作曲している。④

さて、ここで詞の内容を分析してみよう。校歌もその時代相を反映する。どこかで聞いたことがあるが、「歌は世につれ、世は歌につれ」である。明治、大正、そして昭和二十年八月までは、「大日本帝国憲法」「教育勅語」

の時代である。従ってどこの学校でもそうだろうが、先ずは天皇のことが出て来る。本校の校歌は、「皇大君(すめおおぎみ)の広き恵」とある。序でに二つほど典型的なものとして、他校の例を見てみよう。

「いつくしみます大君の深き仁慈(めぐみ)を仰ぎては」(陸軍士官学校)

「皇謨(こうぼ)・天子のはからいごと)仰げばいや高し」(海軍兵学校・江田島健兒の歌)

また日本の象徴としての富士山が出て来る。本校では

「雲に聳ゆる」「尊き」富士である。他の例では、

「神さびて高く尊き駿河なる富士の高嶺を」(万葉集)

「天そり立つ富士ヶ峰の」(陸軍士官学校)

「玲瓏(れいろ)富士の嶺高く」(陸軍航空士官学校)

「玲瓏そびゆる東海の芙蓉の嶺を仰ぎては」(海軍兵学校)

「真白き富士の嶺(ね) 緑の江ノ島」(七里ガ浜の哀歌)

「真白き富士の気高さを」(戦時中の歌謡曲「愛国の花」)

「真白き富士を仰ぎ見て」(旧千葉市第二尋常小学校・現本町小学校) ⑤

そして歌詞は校歌ゆえ、その立地の様子を詠み込む。本校校歌では、富士山、袖の浦、葛葉の岡、都川。

ここで東京湾東北部一帯を指す「袖ヶ浦」の表記についてつけ加えておくと、(平仮名、片仮名の別は措くとして)何ともいろいろあることに気付く。

「袖の浦」「袖が浦」「袖しが浦」「袖師が浦」「袖が浦わ(曲・回)」「袖が浦べ(辺)」「袖浦」

ところでもう一つ驚いた話、国府津の海岸のことを「袖ヶ浦」ということ。まさかここに「袖ヶ浦」があるとは。

⑥

さて今度は詞の構成の検討である。

各節の一、二行目はきれいな対句をなしている。また各節の三行目は、その中对句を含んでいる。第一節と第

三節には五行目にもそれがみえる。

各節の六行目は一種の繰り返し法による表現である。

各節の最終行は完全な繰り返し法が使われている。

各節の六行目をもう一度確認すると、

第一節は「大君の広き恵」だから「いとも畏み仕へまつらん」であり、第二節の先生の教えは「教へ慎み応へまつらん」であり、

第三節の互いの学友は「日々にいそしみ、勤め励まん」で締め括る。

かくて何とも整然とした教育体系が綴られている。まことに格調高く、いかにも旧制中学校の男子たる者の修業のあり方が述べられている。

それに曲も詞に相応しく時代相も反映してテンポは緩く伸びやかであり、荘重である。唱えば自ずから心が引き締まるであろう。

さて、このことについてもう少し専門的に述べてみよう。⑦

作曲者については先述したが、ここではメロディーのことだ。

この校歌の特徴はまず三拍子であることだ。

我が国の昔からの民謡や童謡はことごとく二拍子なのだ。日本人は農耕民族であったため、鋤で耕す一・二、一・二、という均等なりズムなのに対して、ヨーロッパでは騎馬民族だから、空中で跳ねる形で、一・二・三、一・二・三、となって三拍子が生まれたといわれている。東京藝大名誉教授の平野忠彦先生のご存知の限りでは「五木の子守唄」だけが三拍子のようだ。これも一説によると古くは四拍子だったとか。

日本に三拍子が入って来たのは明治の終わりから大正へかけての時代。この頃急に三拍子の歌が作られ始めた。代表的なのは「朧月夜」「故郷（ふるさと）」（ともに高野辰之作詞、岡野貞一作曲）や、「早春賦」（吉丸一昌作詞、

中田章作曲)。そのほかの名曲としては、わが千葉高校校歌を作曲した弘田龍太郎の「浜千鳥」。平野先生によれば「早春賦」や「浜千鳥」は今でも東京藝大の入学試験曲によく採り上げられているという。

千葉中学校校歌が大正四年に制定されていることから、「三拍子の校歌」は画期的なものであったと考えられる。更にメロディーとして目に付くのは、各フレーズの頭が全部「八分音符の三連符」になっていることだ。「クモニ聳ゆる フジノ高嶺、ソラニ連なる ソデノ浦波：」のように、さびの部分以外は全部三連符で出だしている。これは当時としてはとてもおしゃれというか、粋なメロディーになっていたと思われる。

ところで、太平洋戦争が敗戦となった結果、それまでのあらゆるものが否定されるようになった。天皇も神格化されていたのが否定されて、天皇を崇（あが）め奉ることがなくなった。それで学校では、一番の歌詞は適当でないと考えたようで、終戦の翌年に中学に入学した私たちは講堂でただ一度、早崎準一郎先生に校歌を2番と3番の歌詞で教えられただけだった。結局戦後の学校行事では、中学の校歌は一度も斉唱されることはなかった。だが旧制中学を経験した卒業生がいる同窓会や同期会の場では、必ずと言っていいほど歌われているようだ。⑦

註 ① 千葉高「創立百年」武田宗久編著（昭六卒、元本校教諭）昭五四刊。

② 「歌う国民」渡辺裕著（昭四七卒、東大教授）中公新書 平二二刊。

③ 寺尾健氏（昭二七卒）の指摘による。

④ 中村作二氏（昭二七卒）の教示による。

⑤ 篠崎兵衛氏（昭一七卒、元本校教諭）の教示による。

⑥ 「湘南・伊豆文学散歩」野田宇太郎著、英宝社 昭三〇刊。

⑦ 中村作二氏（前出）の教示による。

二、千葉高等学校 校歌 昭和二三年制定

作詞 松原至大(明四三卒)
作曲 東京藝術大学教授 弘田龍太郎

昭和二〇年八月一五日を以って日本の国体は一変した。そして教育界も「日本国憲法」「教育基本法」によることになった。

当然、本校も校歌を変えなければならなくなった。昭和二三年九月一五日制定。わたくしの中学三年の時である。以下、順を追って新校歌のことについて述べてみよう。

まず作詞者について。

松原至大(旧姓村山、本校明治四三年卒)。名は「みちとも」と読む。多分皆さんはわたしと同様ごく自然に「だい」と音読みしているだろう。偶々わたしが「日本童謡集」(与田準一郎編、岩波文庫 昭三二・一二・二〇第一刷)を読んでいたら、この人の名前が出ていて、「みちとも」と振り仮名が振ってあって、へーと驚いた次第である。平成一七年一二月の頃のことである。慎んで紹介しておきます。

どうやら童謡詩人として活躍していたようだ。その後、毎日新聞の少年新聞の編集長などをやっていたようで、校歌を作詞した当時は毎日新聞社友ということであった。

次に作曲者の弘田龍太郎について。①

明治二五年(一八九二)高知県安芸市の生まれ、東京音楽学校卒。

「父が千葉師範の先生をしていて私も附属小学校で学んでいたが、父の転勤のために転校してしまった。それが

なかつたら当然千葉中学に入っていたと思う。」とおっしゃっていた。

本務の傍ら、あまりにも有名な童謡や小学唱歌を作曲されている。

雀の学校、靴が鳴る、叱られて（清水かつら作詞）、

夕焼け小焼け（久留島武彦作詞）、春よ来い（相馬御風作詞）、浜千鳥（鹿島鳴秋作詞）、鯉のぼり（小学唱歌）

千曲川旅情の歌、小諸なる古城のほとり（嶋崎藤村作詞）

このような方で、当時の安田裕校長が依頼したものと思われる。①

次に、この新校歌発表会のことについて。

昭和二三年一〇月頃、全校生徒が講堂に集められて、新校歌の練習が行われた。弘田先生が直々に来校されて直接の指導があった。ピアノの伴奏は一年上の吉野肇氏（昭二六卒）、指揮をしたのは本校の時間講師で、公募で採用された「満州国国歌」を作曲した、旧市立千葉高女・現県立千葉東高校専任の佐野日出男先生だった。

何回か歌って、次の点を注意された。

第一節二行目の「仰ぎ見る」あおぎみる」のところがかうまくいかない。そこを何回か練習させられた。この新校歌の音符上のもので、弘田教授と佐野先生の間でちよつとしたやりとりがあったそうだ。②

そしてその年の十一月一日、創立七十周年記念式典で「新校歌発表」として音楽部の三部合唱で披露された。

この時にタクトを振ったのは療養中の高勇吉先生の代わりで何と美術科の白土光夫先生、ピアノの伴奏は前記の吉野氏。しかも高校の合唱団の人数が足りないというので、我々中学生の仲間が三人駆り出されたのだ。③

この曲は旧中学の校歌と比べると、これも時代の反映かからか明るく軽快で、わたしも唱っていてそこに戦後の姿を感じたものであった。弘田教授は作曲するに当たって応援歌にも使えるようにと言っておられた。④

では最後に歌詞の検討をする。

新校歌といっても、伝統を受け継ぐということか、ちゃんと旧校歌を土台にしている。

第一節では「富士の高嶺」「袖が浦」はそのまゝ。旧校歌の「空に連なる」は「波路遙かに」と少し表現は変えてあるが中身は同じ。

第二節では旧校歌の「緑覆へる葛葉の岡」は「葛の葉しげき丘」に変えてある。そして新時代に合わせて旧校歌の「尊きこの山」は「富士の高嶺のすなおさは」とうまく変化させ、第二、第三節に「正しき文化」「世界平和」を入れてある。富士山の形容を「すなおさ」と捉えたところはまことに珍しく新鮮である。⑤ これは前述の旧校歌のところで述べたものと比較してみたい。

また旧校歌が三節構成で、各節七行、各行は一応定形を踏まえつ、も、七・六、七・七、八・八と若干の変化を与えているのに対して、新校歌は三節構成は同じだが、各節はそれぞれ四行に縮め、各行は七五調を厳格に守っている。そしてこれは一般の詩歌にも言えることだが、五七調は莊重性を帯び、七五調は軽快性をもつ。図形で例えれば五七調は△、七五調は▽と比定してみれば肯けるだろう。

かくて新校歌はまさに伝統を踏まえ、新時代の新しい文化を創造しようとする意気込みが感じられる素晴らしきものと言えよう。改めて叙上のことを理解しながら唱うと、一段と味わい深いものとなるだろう。

註 ① 中村作二氏(前出)の教示による。

② 永野剛氏(昭二六卒)の教示による。

③ 中村作二氏の教示による。

④ 中村作二氏の教示による。

⑤ 寺尾健氏(前出)の指摘による。

(平成二四年八月七日記、同二五年十一月二七日一部補訂)

千葉中學校校歌

(大正4年制定)

千葉中學校 作詞
 楠見恩三郎 作曲
 (東京音樂學校教授)

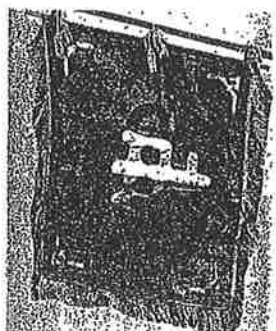
(1) クモリ ソビ ユル フジのタ ーカ ネ ソラ ツ ラ ナ ル
 (2) みどり おほ へケ ル ノはの ーか マ ながれ た ゆ ま ぬ
 (3) ユキ ニ ソミ ガ ヲケ ル ココ ノ ー ホ ホ ナ タ テ ラ セ ル
 ソデノ ウが ラ ナ ミ ハル キ コノ ウ ミ タ フ ト キ コ ノ ヤ マ
 マナ ビ ノ が オ ホ チ タ ドル ヤ モの ワー ミ チ マ モル ヤ ソ の ガ タ
 スサマ メは ナ オナ ビ ホル ノ ギー ミ ノ ヒ ロ キ メ グ ミ ヤ ヨ リ カ ク
 マ ナ ナ ナ トー モ ノ カ タ キ ナ ソ ナ ツ サ リ ほ ケ て
 ウミ サ ミドム ヨリ サ リハ フ カ シル イ ト モ カ ツ シ コ シ ミ ツ ツ マ ツ ラ
 サ ナ サ ニ コ リ カ テ ヒ ビ ニ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ ツ
 イイ ザ ザ イイ ザ ザ イイ ザ ザ イイ ザ ザ ー ヤ ヤ
 イ ザ ザ イイ ザ ザ イイ ザ ザ イイ ザ ザ ー ヤ ヤ

注
 づかいによる「かな」を付記した。

一、雲に聳ゆる富士の高根
 空に連なる袖の浦波、
 遙けきこの海尊きこの山、
 皇大君の廣き恵、
 山より高く海より深し、
 いとも畏み仕へまつらん、
 いざいざいざや。

二、
 緑覆へる萬葉の岡、
 流れたゆまぬ都川水、
 深きは其水繁きは其蔭、
 さはなる功こもれる學舎、
 幾入そめて縁はまさる、
 教へつゝしき應へまつらん、
 いざいざいざや。

三、
 雪にみがける心の玉、
 螢てらせる學の大略、
 たどるや我が道守るや我が魂、
 學の友のかたき望み、
 暑さきたたへ寒さに凝りて、
 日々にいそしみつとめはげまん、
 いざいざいざや。



千葉中校旗

千葉高等学校校歌

(昭和23年9月15日制定)

松原至大 作詞
 (明治43年本校卒)
 弘田龍太郎 作曲
 (東京音楽学校教授)

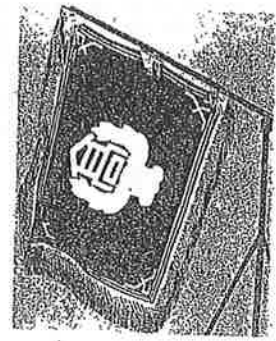
$\text{♩} = 112$

mf

1. ソク デザ ガ ウー ラー ベノ ア ケ クー レ ニ
 2. く オ オ キ は し ー げ き お か と ー い う
 3. ト オ キ レ ー キ ー シ ハ チ カ ラ ー ナ ー り

ナ フ ミ ジ ハ ル カ カ ニ ア オ ギ ミ ル
 フ ボ ー コ ー ウ ー シ ノ ホ マ ー レ ミ ミ ケ テ
 フ た ー だ ー ジ し ノ カ ー ン ノ ス ナ オ サ ハ ワ ー レ ー ラ ケ
 セ ー カ ー イ ヘ ー ワ ノ タ お し ず ナ め わ ー コ ー う ー ド ケ
 マ ー テ ン ー ワ ー レ ー ー ー チ ナ リ ッ ナ ー じ う

- 一、袖が浦辺の 明け暮れに、
波路はるかに 仰ぎ見る
富士の高根の すなおさは、
われ等健児の 生命なり。
- 二、葛の葉しげき 岡という
古きゆかりの 地に生まれ、
正しき文化 推し進め、
若人出でて 幾春秋。
- 三、遠き歴史は 力なり、
母校のほまれ 身につけて、
世界平和の 民となり、
今日を歩まん われ等みな。



千葉高校旗

千葉中学校校歌

作詞 千葉中学校生徒

作監 東京音楽大学音楽教授

《大正四年制定》

植木美思三郎

対句 (雲に聳ゆる富士の高嶺
空に連なる袖の浦波
遥けきこの海博きこの山
皇大君の広き恵 対句
山より高く海より深し
いとも畏み仕へまつらん

♪ 遠く へいぞいぞいぞや

対句 (緑覆へる葛葉の岡
流れたゆまぬ都川水
深きは其水繁きは其陰
さはなる功こもれる学舎
幾入そめて緑はまきる
教へつつしみ応へまつらん

♪ 遠く へいぞいぞいぞや

対句 (雪にみがける心の玉
嘗てらせる学びの大路
たどるや我が路守るや我が魂
学びの友のかたき望み
暑さにきたへ寒さに凝りて
日々にいそしみつとめはげまん

♪ 遠く へいぞいぞいぞや

千葉高等学校校歌

作詞 松原至大

《昭和二十三年制定》

作監 東京音楽大学音楽教授
私田 龍太郎

袖が浦辺の明け暮れに
波路はるかに仰ぎ見る
富士の高嶺のすなおさは
われら健児の生命なり

② 葛の葉しげき丘という

古きゆかりの地に生まれ

(正しき文化) 推し進め

若人出でて幾春秋

遠き歴史は力なり

母校のほまれ身につけて

(世界平和) の民となり

今日を歩まんわれ等みな

△.○.② 即ちそれこれ対句する。

